

関西学院大学名誉教授 細川正義

## 第27回 「他者」と「自己」の関係の深淵を問いつけた 夏目漱石

―「意志の人」から「自然の児」へ 『それから』長井代助の〈愛〉の闘い―

日露戦争後の日本は帝国主義路線のもとに大陸進出をめざし、貿易の進展をはかる積極的な政策を展開していった。一方で大國ロシアとの戦争の勝利によって、国民の個々の自我の覚醒が顕著になって行き、自己の進むべき道への関心と意志が急速に高まって行ったのだが、正宗白鳥の『何処へ』の主人公が「しかし僕は（略）何処へ行くんか方角が取れんから仕方ないさ」と呻吟したように、帝国主義促進路線で軍国主義化が強まって行く中で、個人の主張は抑圧され多くの者が心の内と外の隔絶に対する葛藤を深めていった。そうした中で漱石は明治四十一年に『三四郎』を著し、迷える羊<sup>ストレイ Sheep</sup>として彷徨し「自己本位」をたずねる旅を、主人公小川三四郎を中心にして描いたが、次作『それから』の予告文で、『三四郎』の主人公はあの通り単純であるが、此主人公はそれから後

の男であるから此点に於いても、それからである。

と述べ、『三四郎』の登場人物たちが、時代の混乱に対してよりもその〈時代〉に身を委ねる形で、それぞれが自己の存在の不確かさと寂寥を見つめながら彷徨する姿を中心に描いたのに対して、『それから』では、間もなく浮出して来る大逆事件を前にした、日露戦争後の新旧の価値観が混沌として行く中で、次第に社会との関係性の困難に敏感に反応し、人間関係の複雑さに脅かされていこうとする自己の〈真〉をたずね、〈愛〉の獲得を求めて苦悩する人間像を描いている。

作品は明治四十二年六月二十七日から十月十四日まで朝日新聞に連載された。

作品中に明治四十二年四月に発覚した、国会議員を多数捲き込んだ贈

賄事件「日糖事件」が触れられているので、作品の時代設定が推測できる。作中、主人公長井代助の友人で帰京後新聞記者になった平岡常次郎が、その「日糖事件」に絡ませて「僕は経済方面の係りだが（略）中々面白い事実が拳がっている。ちと、君の家の会社の内幕でも書いて御覧に入れようか」と言い、更に、社会主義者の幸徳秋水を政府がどんなに恐れているかという事も代助に話しているように、『それから』は急速に変化していく社会を背景に、そうした社会に脅かされ、不安が忍び寄ってくる状況下にあつて、それと対峙した形で「自己本位」を求めて格闘する登場人物たちを描いている。

作品はまず主人公長井代助の設定として、彼は、自分を鏡に写して、平然と満足して眺めることのできる男、自分の肉体に誇りを持ち、その肉体が忽然と滅ぶかもしれない危うさをたえず意識せずにはいられないほどに生きたがる男、食うための職業を軽蔑する男として設定され、社会の動きとは遊離した、*arbiter elegantiarum*（趣味の審判者）にふさわしい *in admirari*（何事にも無関心）な態度で優雅な日々を送っている人物として登場している。代助は、自分が就職しないのは「日本対西洋の関係が駄目だから」（六）だという独特の哲学を持ち、「職業のために汚されない内容の多い時間を有する」（三）ことに誇りを感じる生き方を良しとして、「自己本来の活動を、自己本来の目的として」（十一）青春時代を生きてきた。その点、代助の当初は、自己の内に「迷える羊」を自覚するようになる『三四郎』の小川三四郎の〈それから〉の人物として設定されているともいえる。

その彼に波乱が生じてくるのが男女関係が絡んだ人間関係の問題からであった。学校を卒業して大阪の銀行に勤めていた平岡常次郎が部下の使いこみの責任をとって辞職して夫婦で東京に戻って来た時から、代助のそれまでの世の中から超越した *high admiral* の生活に変化が生じてくる。平岡の妻三千代は、学生時代の親友菅沼の妹で、学生時代二人は、

兄は趣味に関する妹の教育を、凡て代助に委任した如くに見えた。

(略) 三千代は固より喜んで彼の指導を受けた。三人はかくして、  
巴の(略)ごとくに回転しつつ、月から月へと進んで行った。(十四)

とあるように、菅沼の意向に沿う形で次第に心を通い合わせるようになっていった。にもかかわらず、菅沼が母親のチフスに感染して、卒業を前に急死したことで、「三巴」が一所に寄って、丸い円になろうとする少し前の所で、忽然その一つが欠けたため、残る二つは平衡を失った」と回想するように二人の関係がストップし、代助は、中学時代からの知り合いで菅沼とも親しく交際していた平岡から三千代との結婚の相談を受けた時に、多少の躊躇を感じながらも、義侠心を発揮し「意志の人」として結婚を取り持ったことを「名誉」(八)とすら考えていた。しかし、三年して平岡と共に帰京した三千代の生活にやつれた様な姿に再会してからは、かつて自己の中に躊躇するものが有ったにもかかわらずその頃「慥かに、自己の道念を誇張して、得意に使い回していた」(六) 自分を優先させて、「意志の人」として、三千代に対して平岡に嫁ぐように促したことを反省する気持ちが強くなった。そして「鍔金を金に通用させようとする切ない工面より、真鍮を真鍮で通して、真鍮相当の侮蔑を我慢する方が楽である」(七) というように、無理に「意志の人」の生き方を選ぶよりも自己の内の「自然」の心の発現に委ねるべきであるという認識の方が勝るように変化していった。そのように「自然」の心に従うことに躊躇しなくなつてからは急速に三千代への思いが心を占めるようになっていった。

平岡に対して「そんなに家庭が嫌なら、嫌でよし、その代り細君を奪つちまうぞと判然知らせたかった」(十三) とまで思うようになって、

代助はついに「意志の人」ではなく、「自然の児」として生きる決心をして三千代に愛の宣告をし、「覚悟を極めましょう」(十四) と、平岡を裏切ることを促した。そして平岡に告白したのだが、その時「僕の毀損された名誉が、回復出来る様な手段が、世の中にあると、君は思っているのか」(十六) と突きつけた平岡は「今日限り絶交する」と宣告し、直後に事の次第を代助の父に手紙で知らせた。当時は、姦通罪が定められていた時代であり、実業界の中核にいる父親は代助の行動の波及も恐れて、平岡からの手紙で事実を知った後すぐに兄を使者として代助に義絶を言い渡した。

代助にとつて「自然の児」の生を選ぶことは友人を失い、父から義絶され、生活の基盤を失うことでもあった。しかし、代助には「父も兄も社会も人間も悉く敵」にしても、「頭の中に、彼自身に正当な道を歩んだという自信」(十七) を持っていて、たとえ完全に孤立していったとしても、世間と闘い愛を貫いていこうとする意識は明確に持っている。作品最後の、職業を探しに行くといつて乗った電車の中で「ああ動く。世の中が動く」と傍の人に聞こえる程の声でつぶやき、頭の中が「火の様に焙(ば)って来」(十七) る中で真赤にもえ上がる世界の只中を「焼け尽きるまで」進んで行こうとするところには、これから立ち向かう世間との闘いの苛酷さが示されているともいえる。そしてその闘っていくべき敵は「赫々たる炎火の裡に、二人を包んで焼き殺そうとしている」(十七) と描かれ、平岡敏夫が「そこには二人の営むべき現実の「家庭」のイメージはない」(『日露戦争文学の研究』下、昭和六十年七月、有精堂) と指摘しているように、二人の救済は予定されているとは言えない。佐藤泰正はそこに「漱石のみつめる闇の、迷路の深さ」(『夏目漱石論』、昭和六一年十一月、筑摩書房) をも推測しているが、しかし、まず重要なことは、苛酷で出口のない戦いを闘っても、内なる「自然」が発現する(愛)の真を守り抜こうとする代助の意志を読み取るべきであり、明治四十二年という社会情勢の混沌とした時代に、普遍の(愛)の価値を明示した所にこの作品の意義が認められるのである。